

七十五年ぶりに確認された

咸鏡道壬辰義兵大捷碑

崔 書 勉

(東京韓国研究院院長)

一、であい

旧韓末、明治四十年頃、日本に留学していた韓国人学生に関する資料を検べている中に、嘯海生と号する学生の「咸鏡道壬辰義兵大捷碑文」と題する興味深い文に接することができた。

その冒頭に「此碑は、わが国の昔、龍蛇の乱において、義兵將、李鵬寿及鄭文孚法公が敵兵を吉州にて大破した事実を記載し、後世に遺伝さすためのものなり。距今六年前、日本に池田○○暗かに偷来し、彼の国の靖国神社（わが契忠壇の如し）後院に移置せる故を見、所感あり、ここに謄写す。」と書きはじめ、碑文を紹介し、彼の所見として、たとえ一片の石碑は日本に移し得たとしても、義兵の赫々たる功績は韓国民の頭の中から持去れものではないとし、この文化財を日本にもたらしたことをとがめ、またこのようなことを許すようになった韓国人の覚醒を促すものであ

った。彼は独立国の国民たる自覚を強くするためか、碑文の中で、皇明と書いた皇の字は「◎」におきかえており、この学生の感慨を知り得るような気がした。

龍蛇の乱とは、日本という文禄慶長の役をさすものであり、咸鏡道壬辰義兵とは、文禄慶長の役において、圧倒的に優勢であった日本軍の攻撃に韓国官軍が敗れたのち、民間の人、僧侶らが祖国の危機を坐視するを得ず、民兵を組織し、敗軍をも吸収し、ときには敗軍を扶け、日本軍を国外に逐出すまでにいたった咸鏡道における場合を指すものである。文禄慶長の役は周知の如く韓国においては、壬辰丁酉の倭乱とよばれ、前後七年にわたって韓国を指すもの全領土が日本軍によって蹂躪された悲劇的な戦争であった。私は日本と韓国での呼称の混同をさけるため日韓七年戦役とよんでいるが、この戦役に関する研究は、十七世紀以来、絶ゆることを知らない。戦後においては、戦前の支配的意見とは異なり、必ずしも過去の史書のような内容のものではなく、むしろ「いわれない戦争」であったとの反省と、攻め入る国の軍隊が、戦争を予期せざる国を攻撃したときの常例の如く、賭戦において日本軍は大勝したが、戦争が長びくにしたがって、戦局は不利になり、無理な講和をはかりながら撤退した終局もかくすことなく詳らかにされている。最近では、この戦役の軍事的無意味に反して、日本の受容した文化的影響に関する研究が高まり、また、その故蹟に関する研究も盛んになっている。京都の「耳塚」の補修もまたその例の一つである。

七年戦役において、日本軍が目的を得ることなく敗退した原因として、明の援軍、李舜臣將軍で象徴される海戦での敗戦に加え、陸における義兵の奮戦が大きく掲げられる。この義兵の活動に関し、戦乱が終ったあと、各地方では地方民の誇りとして顕忠祠を設け彼らの功を永く讃えるべく碑を多く建てたが、この碑石もまたその中の一つであると思えたが、日本に多く伝えられる七年戦役の故蹟の中で、靖国神社の中にこのような碑石があるということは、私

にとつて一つの驚きであった。またあまり知られていないこととも思えたので、去る一月二十二日、休暇で帰って来た長男とともに靖国神社を訪ねることにした。

靖国神社に行つてみて、嘯海生という後院がどこを指すかを知ることの難しさに驚いた。靖国神社は三万坪もあり、その中で後院といい得るのは、僅に一万坪を越えるのである。まずは本殿裏と解釈し林の中をしらべてみた。いくつかの碑石はあったが戦後の風潮を考慮してか憲兵記念碑のように比較的人目を避けて建てる意味あいをもつもののみであった。また後院と解釈できる場所の大半は「神池」を中心に「法泉亭」「靖泉亭」「招魂斎場」などの集会所になっており、その隣りは、また「相撲場」で、碑石の建つていそうな場所ではなかった。七十年前の碑石が、はたしてそのまま残っているだろうかの不安が深まる中を二時間ばかり費した。

最後に、社務所を訪ね、神主さんに来意を告げた。昔の靖国神社は現在よりは広く、現在の法政大学校舎も元は神社の境内の中であったが、そこにあつた能楽堂も今の本殿の前方に移したので、あるいは後院といえ、そこをさすのかも知れないという不安な返答であった。また嘯海生は、距今六年前と言つており、しかもこの文が載っている文献は、明治四十二年（一九〇九）となつていたので、明治三十六年頃の資料を探すようお願いして社務所を出た。しかし、地方へ史蹟探訪に出かけたときなども、案外、その住民は忘れており若い世代になるとその傾向がなお強いことを思いうかべ、あきらめず自分自身の手で、根強くさがすべきであると考え、神社周辺の古い建物の前後をしらべることにした。

靖国神社とは関係のないように見える富国生命ビル前左方のやぶの中にいくつかの碑があるのがみえたので、小枝をおさえ、奥へ進んだ。神社が経営している鳩舎近くまで進んだとき、ほとんど人目をひかない姿ではあるが、他の碑とはスタイルを異にする碑がみえた。古い広い庭石の上に建てられた碑であり、その笠簷は、庭石をかぶせてあり、あたかも大きなきのこの模型のようにみえた。しかし碑石であることははっきりと分る姿なので近よつてみた。いかにも借物の帽子をかぶつた姿であるこの碑がすなわち、嘯海生という「威鏡道壬辰義兵大捷碑」であった。碑の上部に「北関大捷碑」と横書された篆書の下に、縦書の碑文が前面後面にぎっしり書きこまれていた。基底部が本来の礎石でなく、庭石にはめられており、その段階で、セメント固めでかくされたか、運搬の途中破壊されたのか、四文字が判読できないだけで殆どどの碑文も一、二字を除けば読み得る状態であった。

碑石は高さ一八七センチ、幅六十六センチ、石の厚さは十三センチのものであり、碑文の中の文字は一五〇〇余字であった。

靖国神社と富国生命ビルとの間には、あたかも境界を示しているかのような土手堀があるので誤解されやすいが、現在の富国生命ビルは終戦前の遊就館であり靖国神社に属していたわけであるから、嘯海生が後院といつたのはかならずしもまちがいはないであろう。富国生命ビルが昔の遊就館であり、その遊就館の歴史を知らなかったがために時間がかつただけのことである。

戦前の東京を知らない私にとつて遊就館の歴史を知ること自身、この碑石がなぜここにあるかを知る出発点であり、碑石が確認できた感動と同時に遊就館前に移された由来をしらべる義務を強く感じた。

遊就館は、明治十四年（一八八一）各華族の拠金で建てられたのははじまりであるが、一度火災にあい現在の建物、昭和六年（一九三一）に竣工したもので、現在は富国生命が使用しているが、終戦までは遊就館として、天皇の下賜品、靖国神社にまつられている軍人祭神の遺品、武具、戦利品など、二万数千点をあつめ保存展示していた一種

の軍事博物館であった。この碑石がなぜ軍事博物館前にあるのかを考えたとき、当然、日清日露両戦役で韓国に進駐していた軍とのかかわりがありそうに思えた。

社務所を訪ね、碑石の発見を告げると、若い神主さんが確認のため逆に私に案内をたのんだ。碑石の前に立った神主さんも、びっくりしたようであった。社務所に行ってみると、かれはそこを離れた。碑文を読むために小一時間を費したが帰ってきたこの神主さんに依れば、この碑石に関する記録はみあたらないとことであり後日の連絡を約して帰った。

二、遊就館にくるまで

数日後、社務所からはこの碑石に関する文献は何もみあたらないとのことであった。しかし、嘯海生の記せる距今六年前、すなわち彼の論文が載せられた文献が、明治四十二年であるから、明治三十六年頃からの文献を探せば分り得る自信があったので、靖国神社の返答で失望を感じることはなかった。

最初の吉報は、広島女学院大学の清水慶秀教授から送られて来た、明治三十八年（一九〇五）十月三十一日付の「広島日刊、中国」の記事であった。すなわち

「加藤肥州の碑石

今は昔し、豊太閣征韓の役に際し、加藤清正公が平壤を陥れて、記念のため建設したりという石碑は、発きにわが征露軍の発見するところとなりて、本邦に送還することとなり、第二南越丸にて積帰り、再昨廿八日字品に着し、碇泊場司令部馬撃場に揚陸したるが、不日、東京に輸送せらるる筈より」と記されているものであった。この記事は、記

者が、平壤入りは小西行長であって、加藤清正は咸鏡道に進んだことと、加藤が記念に建てた碑ではなく、むしろ加藤を打敗ったことを記念するために建てた碑石であることを誤解しているが、この碑石の到着を知らせた最初の記事としては貴重であった。

明治三十九年の「歴史」と「地理」と「考古界」の両学界誌が、この碑に関して、彙報であつてはいるが、各々「北関大捷碑の輸送」「北関大捷碑」「加藤清正撃退の碑」等がそれぞれであり中村久四郎が会寧府の顕忠祠碑文と誤認して書いた「韓国会寧府の顕忠祠碑銘について」と題する論文もある。

この両学界誌の述べているところから知り得たことは、次のような内容である。

明治三十七・八年の日露戦役において、北韓進駐軍司令官後備第二師団長、三好成行中将の麾下軍隊は、露西亜軍を豆満外に圧迫するため北韓に進駐していたが、第二師団傘下の第十七旅団長、池田正介少将が咸鏡道臨瀛駅にある「北関大捷碑」を発見し、所在地の主たる者、数十名を招き、諒解を得て三好中将の帰国に托し、明治三十八年十月二十八日広島に着き、翌年五月二十七日東京湾に着き、宮城内の振天府に陳列されることとであったが、最後に遊就館に移立したことになる。池田少将の諒解とは、地元の主たる人々に「日本は、朝鮮国の独立のため、日清戦役と日露戦役の前後二回も大戦争を為したるが、今や、幸に交戦の目的を達し、日韓両国の親睦を永遠に保つ上において、このような記念碑を永存することは、両国間の感情を害すべき因たるに過ぎざるに付、出来得べくんば、この石碑を撤去せられん事を切望すとの趣旨を諄々説きたるに彼等も大いに池田少将の至誠に感じ、遂に之を撤去して池田少将に譲与せしより同將軍は深く彼等の厚意を徳とし、三好師団長凱旋の節し同師団長に託して、東京まで持還へられたるものなり」となっている。この記事の内容の真偽を問うことは、今更意味があるとは思えない。日清、日

露戦役の直後においては日本軍は、天皇の開戦詔勅通り、韓国の独立のためであると信じていた韓国人が多かったからである。伊藤博文を暗殺した安重根でさえ、日露戦争は韓国の独立のためだと信じ日本軍に協力したことがあるほどであるからである。

しかし、このような記事の前後には加藤が敗退したというのは「うその記録」であるとか、「針少捧大のもの」であるとか不愉快を示し、はなはだしきは、この碑石を日本にもってきたことを讃え「吾人は皆拳を賛するものなり。尚、彼の満州懷仁峴洞溝にある高句麗古碑も此と同じく、本邦へ輸送せられんことを望むものなり」と飛躍している。高句麗古碑とは、今、改竄されたかどうかで問題になっている広開土王碑のことであるが、当時の意気高き、戦勝国の軍人として、日本軍が過去において負けたという記録が、いかに彼らを不愉快にし、また信じたくなかったことであることは想像にかたくない。

私見としては、日露戦役の頃、北韓に進駐していた師団は、露西亜軍との接触が少なかったため、戦利品らしきものがなかった。そこでこの碑石は戦利みやげとしては恰好のものであったのではなかったかと思われるのである。実際、奉天地区に進駐した軍からはこのような碑石持入りの話はなく、戦闘に使われた戦利品が主にもたらせていることから、そのように考えられるのである。

三、碑文の意味すること

靖国神社境内の義兵大捷碑の内容は、左のようなものである。

有明朝鮮国咸鏡道壬辰義兵大捷碑

中訓大夫守掌楽院正知製 教兼 世子侍講院輔德崔昌大 撰

通政大夫吏曹參議知製 教尹徳駿 篆

朝散大夫前行 孝陵參奉李明弼 書

在昔壬辰之難其力戰破賊雄鳴一世水戰則有李忠武之閑山焉陸戰則有權元師之幸州焉有李月川之延安焉史氏記之游談者誦之不倦雖然此猶有位地資於乘賦什伍之出也若起草微奮逃竄徒以忠義相感激卒能用烏合取全勝克復一方者闕北之兵為最始万曆中倭酋秀吉怙強驚逆規犯 中国怒我不與假道遂大入寇長驅至都 宣廟既西幸而列郡瓦解賊已陷京畿其驍將二人分兵首兩路行長躡 行朝西清正主北攻其秋清正入北道兵銳甚鉄嶺以北無城守焉於是鞠敬仁等叛應賊敬仁者曾寧府吏也素惡不率及賊到富寧險危窮亂執兩 王子及宰臣奔播諸并縛者長吏與賊効鏡城吏鞠世必其叔父也及明川民末守木男連謀相党并受賊所署官各據州城聲張勢立殺脅惟所指數州崩駭人莫自保鏡城李鵬壽為氣士也奮日縱國家創攘至此兇徒敢爾耶乃潛與崔配天池達源姜文佑等謀起義兵諸人地相夷莫適為將評事鄭文字有文武才無兵可戰脫身匿山谷間開義兵起欣然從之遂推鄭公為主將鐘城府使鄭見龍慶源府使吳応台為次將敵血誓義募兵得百餘人時北虜又侵北邊諸公使人誘世必并力禦北虜世必許之內義兵州城明朝鄭公建旗鼓上南城樓誘世必上謁時其入目文佑禽之斬以徇敵其脅從即引兵南趣明川又捕末守等斬之曾寧人亦討敬仁誅之以應義兵軍勢稍壯來附者益衆吉州人許珍金國信許大成亦聚兵為聲援當是時清正令偏將領精兵數千據吉州身率大軍屯南關以護之十一月遇賊于加坡將戰鄭公部署諸將見龍為中衛將屯白塔應台及元忠怒為伏兵將分屯石城○會韓仁濟為左衛將屯木柵柳擊天為右衛將屯涅河金國信許珍為左右斥候將分屯臨瀛方賊兇勝不甚備諸軍并起揜擊乘銳斃之士無不疾呼先登者賊敗走縱兵追之殺其將五人斬獲無數盡奪其馬畜兵

機於是○遠近響震將吏止伏者争起應之衆至七千餘人賊收入吉州城窘不敢動列伏于旁隘邀其出輒剿之已而城津賊大掠于臨
 溟率輕騎襲之草○草山設伏伺其還夾擊大破之又斬數百人遂剖其腹腸暴之大路於是兵聲大振賊益畏之十二月又戰于雙浦戰方
 合偏將引鐵騎橫衝之○迅如風雨賊失勢不及交鋒皆散走乘勝又破之明年正月又戰于端川三戰三勝還屯吉州休士既而清正知
 軍不利遣大兵迎還吉州賊我軍尾擊至白塔大戰又敗之是役也李鵬壽許大成李希唐戰死賊遂退不敢復北當是時 皇明將
 李如松亦破行長於平壤鄭公乃使崔配天間行奏捷 行在 上引見流涕贈鵬壽司憲府監察 賜配天秩朝散時觀察使怒文孚
 不稟節度而疾義兵功聲出已聞奏率以誣揜以故賞不行久之 顯宗時觀察使閔鼎重北評事李端夏聽於父老以實聞於是加
 贈文孚贊成鵬壽持平餘人贈官有差又建祠鏡城 之漁郎重祀同事諸人 賜額曰彰烈今 上庚辰昌大為北評事既與義旅之
 子孫訪問前故得事蹟為詳慨然想諸公之風又嘗路所謂臨溟雙浦者觀其營壁戰陣之所徘徊指顧為之咨嗟而不能去問語其長
 老曰島夷之禍烈矣三京覆而八路壞諸公出萬死一生提孤軍摧勁寇使我家與王旧地卒免於左衽而邊塞之人興於聽聞勸於
 忠義者又誰之力也幸州延安俱碑碣載事乘烈東西者瞻式以關北 之功之盛獨闕焉庸非諸君之恥歟咸應曰然惟鄙人志矧公
 命之遂伐石鳩材財以人來請文辭非其人又來曰斯役也公實首議不得命將輟余乃叙其事系之銘曰
 有盜自南讐我 大邦我 王于藩以國受鋒屹々北原狼虺穴埔有盜者珉不抗而從血口吞齊毒以兇士也竭々俊群攸同兵義
 莫利不屑戈弓既殲叛徒寇莫我衝武夫鼓乎山摧海涵師征孔赫厥醜崩嶺協底 帝罰匪私我忠北土既平爾蠶我農 大君曰咨
 孰尚汝功 贈官命祠光惠始終士風其烈民可即戎臨溟之厓有石崔崔刻之誦詞用詆無窮
 崇禎甲申後六十五年十月 日立謹撰

○は碑石の文で判読できない部分を表したものである、
 (本文の傍に記入した文字は農圃先生文集の臨溟大捷碑との相違を対照したものであり、

この内容は、白塔郊戦鬪として有名な一五九三年一月二十八日の戦鬪前後に関するものである。宣祖中興誌や農圃
 集などに詳しくかかれていた文禄慶長の中の輝かしい義兵の記録の一つである。
 この碑文を現代語に訳すれば次のようなものになると思う。

昔、壬辰の乱において、力をつくして闘い、敵を破り、一世に雄をならした者として、海戦においては、李忠武
 (舜臣)の閑山の捷あり、除戦においては、権元師の幸州の大捷あり、また、李月川の延安大捷あり、歴史がそれ
 を記録し、話す者、それを讀んでやまない。

しかし、これはむしろ、地位があり、馬と賦役と群卒を出し得ることに、資することがあったからである。つかれ
 果て、弱きところから立ち上り、逃げかくれた者たちを奮いおこし、忠義をもって、互に励ましあい、ついに鳥合の
 衆をもつかい、完全な勝利を得、国土の一部を回復した者としては、関北の兵士がその最たるものである。
 はじめ、万暦の頃、倭の酋長、秀吉が強力な軍隊をたのみ、中国を侵さんとうかがい、我らが、その侵略のための
 道を貸さないことを怒り、ついにかえって、我国に攻入り、ソウルにまで至ったがため、宣祖は既に西に行幸され、

西へ行き、清正は北方を攻めることと担った。その年の秋に、清正は北道に攻入ったが、敵の軍隊が甚だしく強かった
 ので、鉄嶺より北の各城は守ることができなかった。このとき、鞠景仁は叛逆し、敵に内応してしまつた。景仁は会
 寧府の官吏にして、本性悪しく服従することをおこたっていたが、敵が富寧にくるや、その危機を利用して、乱をおこ
 (半月城通信)http://www.han.org/a/half-moon/
 した。乱を避けてきた二人の王子とその大臣を敵に代って捕え、その他の随行軍士と官吏たちを縛り、敵に渡し、誠を
 みせた。鏡城の官吏であつた鞠世弼は、かれの叔父であり明川の末秀、木男とともにむれをなし、敵の出した官職を

受け、各々地方に拠つて勢をはり、殺りく威嚇すること、敵の言うままにふるまうので、多くの地方が崩れ、おそれて人民を支配することをつつけることができなかった。

鏡城の李鵬寿は義気のある士にして奮慨して、国家の危きここにいたれると言えども、兇徒があのようなふるまえるものなのかといひ、崔配天、池達源、姜文佑等とともに、義兵を起すことを企だてたが互に、その地位が等しいので、指導者と仰ぐべき適当な人材がいなかった。

評事鄭文孚は、文武の才はあったが、軍兵がなく、身を山谷に隠していたところ、義兵が起きるといいうわさを耳にし、喜んでこれを逐うたところ、たまたま、この鄭公を推して主将にし、鏡城討使、鄭見龍、慶源討使、吳応台等を次将にすることにし、血をもつて誓いあい、義兵を募り、百余名を得た。

この時、北方のオランケ(満洲からの敵)が、また北方の国境を侵してきたので、人をよこし、世弼をなだめ、共に力をあわせ、オランケを防ごうと誘つたところ、世弼もこれに同意し、義兵を城内に入れた。翌朝、鄭公は、旗鼓をあげ、南門に上るよう誘ひ、世弼が、遙拝の折、これを捕え、首をきり広く衆に示した。また彼の脅かしに随つたものは、これを放した。

その後、ただちに、軍を率い、明川に行き、末秀等を捕え、これをきつたところ、会寧の人々も、景仁を襲い殺して義兵に呼応してきたので、義兵の勢はますます増え、随うものも、増々数をふやし、吉州の許珍、金国信、許大成らも、また義兵を募り応援した。このとき清正は、副将に精兵数千名したがえ、吉州によらしめ、清正自身は南関に陣をしき応援していた。

鄭公は十一月に敵を加坡里で、迎え討つべく、多くの将を配置した。鄭見龍は、中衛将とし白塔に、吳応台、元忠

恕は、伏兵将とし、石城と毛会に、韓仁濟は左衛将と木柵に、柳肇天は右衛将として涅河に、金国信許珍は、左右斥候将として臨瀛に陣を布かせ、対峙したところ、敵は戦勝に捲き、防備をおろそかにしていた。我が軍は勇撃して、敵陣を襲い、勇気を得て、歓声をあげざる者なく、前進したところ、敵は敗れ退くを見、更に追撃して、その将五名を殺し、数多くの首をきり、その馬と武器をとりあげた。これがため、遠近ともに震動し、兵士官吏ともに、逃げ去り、隠れていた人たちが先を争い随う者がふえ、七千名に達し、敵はついに吉州にたて籠り、動くことができなくなり、道に伏兵を置き、敵が出さえすれば、これを打破つた。

城津の敵が臨瀛に大きく攻めてきたので、精兵なる騎兵を率い、これを襲い、山に伏し、敵の帰るのを待つて両方から挾撃して大きく敗り、数百をきり、まさにその腹をきり、そのはらわたを道にさらしたところ、倭軍の志気大いに落ち、敵はおそれるばかりであった。

十二月にまた雙浦にて戦つたが、戦たけなわなるとき、偏将が鉄騎を率い、風雨の如くすばやく横より攻め入れれば敵は戦意を失い、たち向うこと忘れ逃げ散つたので、戦勝の勢をかり敵を散らした。

翌年正月、端川で戦つたが、三戦して三勝して還り、吉州に陣を布き、兵士を休ませていたところ、清正戦況の不利なるを知り、大部隊を送り、吉州の敵を迎えようとしたので、我軍は、その後を逐ひ、白塔にて大きく戦い、これを敗り、この戦において、李鵬寿、許大成、李希唐が戦死したが、敵はついに敗走し、二度と北方に来ることができなかった。

このときは、明の將軍李如松も、また行長を平壤で敗つておつた。鄭公は、崔配天を間道を通して王の行在所に、勝利を報告したところ、王はかれをよびよせ、涙をながしながら、李鵬寿には、司監討監察の職を贈り、崔配天には

朝散大夫の階級を授けた。

このとき、觀察使、尹卓然は、鄭文学が節度使に知らせなかつたことを怒り、義兵の功績が自分より勝れていることを嫉み、王には、功勞をかくし、嘘を報告していたがため、鄭公には褒賞が行なわれなかつた。

長い間を経た後、顯宗の時になって、觀察使、閔鼎重と北評事李端夏が、父老たちより聞き、史実を知らせて、はじめて鄭文学には、賛成、李鵬寿には持平の職を贈り、のこりの人たちにも差等をつけ、官職を賜り、また鏡城の漁郎里に祠堂を設け、当時の同志たちを祀らせ、彰烈となづけた額を賜わつた。

今上の王の庚辰の年に、崔昌大が北評事となり、義兵の子孫とともに、縁故の地を訪ね、史実を詳しく得、慨然して諸公の氣風を想いうかべ、また臨瀛、雙浦を訪ね、軍を張り、闘いし古しえの故蹟をしらべ、歎きのあまり、去ることを忘れた。

地方の父老たちに対して「島夷どもの戦禍烈しく、三つの京陥落し、八道が破壊されたが、この方たちは、命を賭して義兵を起し」はげしき敵を打破り、我國の国土が敵の領土になることを防ぎ、辺境の人もこのしらせをきき、立つて忠義を勉めるにいたつたのは、また誰の力であつたか、幸州、延安にはみな碑碣があり史績を書き、功烈をあらわしている、行き来する人々がこれを仰め、頭を下げているが、関北の尊い功績をしても、碑碣がないのは、全く諸君の恥ではないか」と言つたところ、地方の民口をそろえて「然りそれは我らの希いでもあり、まして公の命令すらあるのにおいておやだと言ひ、ついに石を整え、財物を集め、人をよこして、余に文をたのんできたが、余はその任に適せずと辞退したところ、あらためて訪ねてきて「このことは公の発意によるものであるのに、文を書くことをききいれなければ、この案は取消す」というので、余は意を決しその史績を叙述し、また詞を加えた。

南方より 盜賊来り 明を討たんとし 我 隣國なるをもつて 全土に禍を受く。
高き所 北國 敵の巢窟となり おろかなる民は たたかうことなく これに従う。

血ふくむ口より 凶き毒吐かれば 壮なるかな 我が義兵 意氣高し。

兵士なるもの 義を重んじ 槍と弓もおどり 反逆の群をうてば 敵もまた 抗じ得ず。

義兵鼓をうてば 山は崩れ 海は沸き 義兵 術にたけ 憎き敵破る。

天の罰下れるは 私事ならざる 正義の力 北國の地は安らぎ 蚕は育ち 畑は農す。

大君おどろき 汝の功にすぐるものなしと讃え 位贈り 額賜わり 恵み多し。

士大夫 氣風高く 民また強く 臨瀛の川辺に そそり立ち石あり 讃え頌し とこしえにあらわす。

会寧の顯忠祠には、鄭文学、申世俊、吳允迪、崔彦英、許璫、鄭余慶、李希日、許璫、吳遵礼とが祀られ、所謂会寧の八義士としてたたえられ、鏡城の彰烈祠には、鄭文学、李鵬寿、崔配天、姜文佑、池達源、徐遂、李麒寿、吳慶献らが祀られ地方の人は壬辰八義士としてあがめ、後に朴惟一、李希唐の両功臣が追享されている。

この二つの祠にある碑文は、金石総覧にも載っており、その内容を知ることが難しいことではないが、靖國神社に現存するこの碑石については韓国の現存する資料から照し得る資料を得ることは、難しかった。その理由は、会寧の顯忠祠鏡城の彰烈祠は共にその地方の人が、地方の誇りとして建立し、冬、顯宗から賜額があつたので、文献として残っている資料が多いのに比して、この碑石は祠として残っていたのではなく、ただ壬辰戦捷碑としてのみ存在、賜額の榮に浴していなかつたようである。韓国の官版地方邑誌に前二者は記載してあるが、この碑石に関しては記載されていないのである。

全鮮名勝故蹟なる書籍の咸鏡北道の欄が、ようやくこの碑の由来を知り得ることのできる資料であった。
吉州明月駅の項に

「許惟礼曾孫珍、壬辰倡義勵忠討賊、疏請録用其子孫、上命採施、到州広詢厥美、則儒生許喆者拭淚而陳日、壬辰倭制、龍馭西巡、咸鏡監司、尹卓然鳥窠雌伏、北兵使韓克誠、南兵使李渾守鉄嶺以北、賊勢猖狂、明川官奴、末守、会亭官奴、陶景仁為賊囹張、王子臨海君順和君、重臣黄廷瓊、黄赫、兵使韓克誠、判官李弘業、明川果監、韓仁祿等次第縛送賊陣、吾祖父珍、武興士金国信、儒生李鵬寿等、忠奮感慨、潛行山石、以鳩兵誓復、賊卒及士民忠者千衆、推北評事鄭文学、軟血矢天將調撥、左衛將韓仁濟、中衛將、鄭見龍、右伏兵將、元忠恕、左伏兵將、吳応台、斥候將、許珍、左斥候將、金国信及許大成、崔配天、池達源、柳擎天、姜文佑、許忠等、撥乱克復、掠逐賊兵、執景仁誅之、并採訪録用」

ついで、「壬辰戰捷碑—在溟川書院南一里、碑文崔昌大撰とあったので、この碑石の元あったところを確認することができた。後、その近くに許惟礼、元忠恕、許珍、金国信、許秀敏、許大成、許誠一らを祀る祠も建てられるにいたったことも知ることができた。

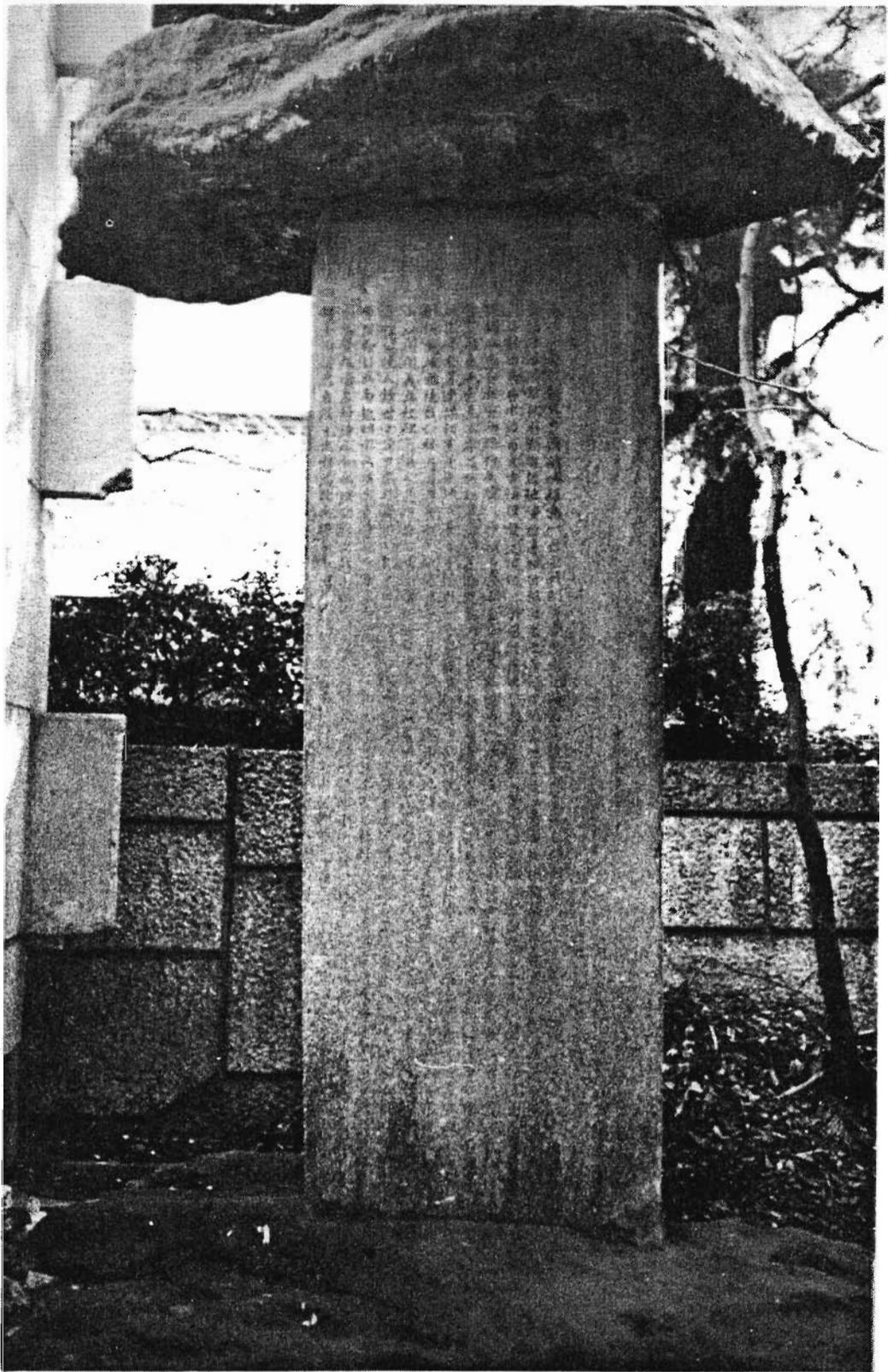
戦後、韓国に居住している咸鏡北道出身の人々が集まって咸北大観を出刊しているが、各地方の項に顕忠祠、彰烈祠が誇らしく書き綴っているに比し、吉州の欄には、戦捷のことだけでこの戦捷碑の言及がないところをみると、明治三十六年という七十五年も前に失われたこの碑はすでに同地の人の記憶から忘れられていたように感じられた。その意味においてこの碑の現存が確認できたことは吉州の民のみでなく韓国金石学発展のため大きな意味をもつものと思える。

二月訪韓の折、鄭文学の農圃先生文集を韓国語訳で出版された李殷相先生を訪ね、以上の事を報告したところ、このほか喜ばれた。また、農圃先生文集の朝鮮国咸鏡道臨溟大捷碑銘の部分を提示され、靖国神社にある咸鏡道壬辰義兵大捷碑が表現の相異はあるが、内容の一致していることを教示して下さった。

農圃集に収録されている臨溟大捷碑文と、靖国神社にある咸鏡道壬辰義兵大捷碑の対比したことによって、破損された部分が判読できたことは幸いであったが、鄭文学の功を嫉んで王に虚偽の報告をした尹卓然の名が、靖国神社のそれには刻まれていなかったことを発見し、何か釈然としないうところがあつた。また人名の書誤りも、いくつか発見された。字の誤りは大した問題にならないほど対比できる方法があるので問題にならないが、尹卓然の名がないことは碑文を刻む段階で故意に除いたものか不安な気持ちにかられざるを得なかつた。

李殷相先生に報告した後、この碑文に讚えられている方たちの子孫が戦後避難南下し、以後南韓国に健在していることが確認できたこともよろこびの一つであつた。

李鵬寿の十三代の直孫の李慶孫氏は、鏡城郡漁郎からソウルの新堂洞に住んでおり、現在文教部の社会教育局長の鄭泰秀氏はまた鄭文学公の十代孫である。崔配天の直孫もまた筆者自身と同貫でソウルに住んでいる。



北 関 大 捷 碑